2024年度 医療衛生学部 一般選抜試験（後期）

【リハビリテーション学科】

受験番号										氏 名	

【注　意　事　項】

1. 試験監督による解答始めの指示があるまで，この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は，120分です。
3. この問題冊子は１ページから72ページまであります。
4. 解答は各科目所定の解答用紙（物理・化学・生物・国語はマークシート）の所定欄に記入すること。
5. 数学の問題Ⅰは答えのみを，問題Ⅱは答えだけでなく解答の過程も簡潔に記すこと。解答の過程も採点の対象となります。
6. 物理・化学・生物・国語の解答は，所定欄に鉛筆で濃くはっきりとマークすること。その際，ボールペン・サインペン・万年筆等は使用しないこと。その他マークの仕方に関しては，解答用紙（マークシート）の注意事項をよく読むこと。
7. 試験監督の指示により，問題冊子に**受験番号**及び**氏名**を記入すること。
8. 試験監督の指示により，解答用紙に**受験番号**及び**氏名**を記入すること。物理・化学・生物・国語の解答用紙（マークシート）には，**受験番号**をマークすること。また選択科目欄には**選択する科目**を記入し，マークすること。正しくマークされていない場合は，採点できない場合があります。
9. 出題科目，ページ及び選択方法は下表の通りです。

出題科目	ページ	選　択　方　法
数　学	3～ 9	左記出題科目から，2科目を選択して解答すること。
物　理	11～22	
化　学	23～32	
生　物	33～43	
国　語	45～72	

10. 物理・化学・生物・国語の解答用紙（マークシート）は折り曲げたり，メモやチェック等で汚したりしないように注意すること。マークを訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，中途半端な消し方をしないこと。不正確なマークは採点の対象外となります。解答用紙（マークシート）に消しゴムのかすが残っていると，採点が不可能となる場合があります。
解答用紙（マークシート）の両面の消しゴムのかすは，回収前に取除いておくこと。
11. 問題冊子の余白は適宜使用してもかまいませんが，どのページも切り離してはいけません。
12. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明，ページの落丁・乱丁及び解答用紙（マークシートを含む）の汚れ等に気づいた場合は，手を高く挙げて試験監督に知らせること。
13. 試験終了後，問題冊子と解答用紙（マークシートを含む）はすべて回収するので，机上に置いておくこと。持ち帰ってはいけません。また，選択しない出題科目の解答用紙は，大きく×印を記入すること。

国　　語

2024年度 一般選抜試験（後期）

医療衛生学部

【注　意　事　項】

1. 国語の問題は45ページから72ページまであります。
2. 解答用紙（マークシート）の氏名・受験番号欄に記入・マークすること。
3. 選択科目欄に選択する科目を記入・マークすること。
4. 解答は解答用紙（マークシート）の解答欄にマークすること。
5. マークする際は濃くはっきりとマークすること。その際，ボールペン・サインペン・万年筆等を使用しないこと。その他マークの仕方に関しては，解答用紙（マークシート）の注意事項をよく読むこと。

Ⅰ　次の文章を読んで、後の問1～問10に答えなさい。

脳の(注1)リバースエンジニアリングという視点に立てば、科学も宗教も、「幸せに楽しく生きる」という共通の要求機能を実現するために、(1)脳が作り出した別解だと筆者は考えます。そして、それを支えるのが意識システムです。

エンジニアの使命は、科学と技術を磨き、社会を豊かにしていくことです。しかし、私たちは、本当に科学と技術で幸せになったのでしょうか？　確かに100年前と比べれば、生活は便利で豊かになりました。インターネットやパソコンがない時代には戻れません。でも昔の人たちは、インターネットやパソコンがなくても、(ア)それなりに幸せに暮らしてきました。その理由は、いつの時代も、幸せを感じる脳のメカニズムが大して変わっていないからです。

私たちの脳には報酬信号としてドーパミンが分泌されます。特に、それまでできなかったことができるようになると、たくさんのドーパミンが分泌され、とても嬉(うれ)しくなります。これを原動力として、私たちは、科学技術を発展させました。科学技術だけではありません。日々の勉強や運動もそうでしょう。ゲームのような娯楽でも、(2)この仕組みが逆手に利用されています。スマホのゲームをいつまでも止(や)められないのは、ゲームの世界での成功体験により、報酬システムが乗っ取られた中毒症状です。

この報酬システムは、私たち人間が荒野を走り回り、狩猟生活に明け暮れていた頃から使われてきました。脳の設計仕様からすると、現在はすでに想定外の環境になりつつあるのかもしれません。どのように想定外かというと、便利な生活に慣れると、ドーパミンが分泌される機会が激減するのです。狩猟生活で苦労して手に入れた食事とコンビニでいつでも手に入る食事のどちらに幸せを感じるでしょうか？

とても皮肉なことですが、便利な生活の中でも、幸せに楽しく生きるためには、ドーパミンを補わなければなりません。そのために現代人は、スマホのゲームに時間を浪費しているように見えます。これは、やはり生産的ではありません。

どんなに生活が便利になっても、幸せに生きるためには、これまでと同じように技術を磨き続け、さらなる便利な生活を追求するのがエンジニアの宿命なのかもしれません。焼け石に水でも、新たな成功体験を少しでも作り出し、ドーパミンを放出させる機会を提供するのです。しかし、このような理由でがむしゃらに頑張り続けるのは、［　X　］ようにも思います。

多くのエンジニアは、真っ先に既存技術の改善を考えます。人工知能的な戦略で、さらなる最適化を図るのです。改善の余地が明確にあるうちは、これはとても有効な戦略です。1960年代の高度経済成長期やジャパン・アズ・ナンバーワンと言われた1980年代の安定成長期は、がむしゃらに技術を磨き、いいモノを作ればよい時代でした。昨今の人工知能ブームでも、プログラムを改善すればするほど、人工知能の性能

国語

が向上し続けました。

しかし、技術が成熟の域に達すると、人工知能的な戦略のコストパフォーマンスは悪くなります。経済的なコストだけではありません。同じように、がむしゃらに頑張っても、その結果として分泌されるドーパミンも減ってしまうのです。そして次第に［Y］が生まれます。

そのようなときこそ、発想を転換し、生命知能的な戦略も試してみるべきでしょう。従来の戦略ではコストパフォーマンスを期待できないからこそ、今までとは違うことを試せるチャンスなのです。

そのためには、既存の一つの評価軸にこだわるのを止め、新しい評価軸や価値観をいくつも作ったほうがよいと考えます。評価軸は、［A］年収かもしれませんし、出世かもしれませんし、家族との時間かもしれませんし、趣味や知的好奇心の満足度かもしれませんし、ワーク・ライフ・バランスかもしれません。

どの評価軸をどのような比率で選ぶかは、生活や環境に応じて、各人がドーパミンを出しやすいように決めればよいのです。全員一律の基準を決める必要は全くないのです。目指すべき社会の「ダイバーシティ」とは、人種や性別の共存だけでなく、さまざまな評価軸や価値観の共存です。

どのようにして新しい評価軸を作るか、また、どのようにして自分の評価軸を選ぶかに、明確なロジックはありません。ロジックがないということは、人工知能的な戦略は役に立ちません。人工知能は立法、すなわちルール作りには、役に立たないのです。［B］、当然のことですが、評価軸や価値観は自分で決めなくてはなりません。無数の可能性の中から、自分だけの世界を作るわけですから、これはまさに意識システムの出番です。

ただし(3)留意すべきなのは、私たちが、一律の評価軸を決めたがることです。たとえば、科学技術政策を考えてみましょう。大学には、応用研究を推進する研究室も、基礎研究を推進する研究室もあります。どの研究がよいか、優劣をつける一律の基準は決して作れません。その多様性こそが、大学の強みなのです。［C］、わが国の最近の政策は、いつも「選択と集中」です。その結果、人工知能ブームと脳科学ブームが交互に訪れます。重要な研究分野に集中的に投資することは大切ですが、それ以外の研究分野を根絶やしにしてはなりません。そのような政策のもとでは、個々の研究者は、生命知能的な戦略を控え、人工知能的な戦略を取らざるを得ません。その結果として、アカデミアの研究の多様性は急激に失われます。

働き方も同様です。筆者が大学院生だった２０００年頃から、年功序列型の組織が批判され、成果主義が(イ)もてはやされるようになりまし

た。現在では、人に仕事をつける「メンバーシップ型雇用」よりも、仕事に人をつける「ジョブ型雇用」がもてはやされています。最近では、新しい雇用モデルとして「45歳定年制」が提案され、物議を醸しました。

しかし、これらは本来、優劣をつける問題ではありません。年功序列型の組織があってもいいし、成果主義型の組織があってもいいのです。45歳で定年の組織があってもいいし、定年がない組織があってもいいのです。自分たちの組織に合うように、制度を作ればいいだけなのに、多くの組織は、周りと同じような評価軸を導入しようとします。みんな同じのほうが、安心できるからです。しかし、その結果として多様性が失われると、(4)社会は人工知能化します。

人工知能が人間の活躍の場を奪うという危機感が(ウ)喧伝(けんでん)されていますが、それは明確なルールや絶対的な評価軸がある場合に限ります。私たちが自分で評価軸を決めることを放棄しない限り、(5)人工知能が私たちを席巻(せっけん)することはあり得ないでしょう。逆に、私たちが意識システムの活用をやめ、一律の評価軸を外部に求めるならば、つまり、(注2)哲学的ゾンビのように生きることを選ぶならば、生命知能に出る幕はありません。そのような人たちには、おそらく前述の危機感は現実となります。私たちが人工知能に感じる脅威は、ゾンビのように生きる恐怖なのかもしれません。

これらを忘れずに、人工知能ができることは、人工知能に任せ、ムダを省いてもらえばよいのです。その分、私たちはムダを作り出しながらも、新たな評価軸や価値観を形成していくべきではないでしょうか。それが、人工知能と生命知能の共存のあるべき姿だと思います。

最後に、エンジニアの奮闘の一方で、宗教は、科学技術とは全く異なる方法で、幸せに生きる方法を探求してきたことも忘れてはなりません。新たな成功体験ではなく、いつも変わらない安心感で幸せを提供するのです。どちらも脳にとって同じくらい価値があります。

エンジニアが高い付加価値を生み出すために、[D]、私たち全員がウィズ人工知能時代を幸せに楽しく生きるためには、少し立ち止まって、脳の働き、特に知能のメカニズムや意識の働きを自分なりに考えることが、今後ますます重要になるでしょう。

（高橋宏知『生命知能と人工知能　ＡＩ時代の脳の使い方・育て方』講談社）

（注1）リバースエンジニアリング――機械を分解したり、ソフトウェアの動作を解析したりするなどして、それらの構造を分析し、製造方法や動作原理などを調べること。本文では、人間の脳についてこの言葉が用いられている。

（注2）哲学的ゾンビ――人間と物理的、行動的にはまったく同じであるにもかかわらず、主観的な意識を一切持たない存在。哲学の思考実験の上で提示される。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　傍線部（ア）～（ウ）の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 3 。

（ア）それなりに 1

① 平均的には
② とりあえずは
③ 少しばかり
④ 相応には
⑤ さしあたって

（イ）もてはやされる 2

① 褒めそやされる
② 見直される
③ 取り上げられる
④ 疑問視される
⑤ 広く認められる

（ウ）喧伝されて 3

① 世の中に広まって
② 盛んに言われて
③ 批判を受けて
④ 過大に評価されて
⑤ ねじ曲げられて

問2　空欄 A ～ D を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号はA・ 4 、B・ 5 、C・ 6 、D・ 7 。

① さらには　② したがって　③ たとえば　④ しかし　⑤ あたかも

問3　傍線部（1）「脳が作り出した別解だ」とあるが、科学と宗教はどのような点で異なると筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

① 科学は新たに成功を重ねていくことを通じて人びとを幸せにするのに対し、宗教は人びとを安心させることで幸せにするという点。
② 科学は社会を豊かにはするが人びとを幸せにするとは限らないのに対し、宗教は安定することの幸せを常にもたらすという点。
③ 科学は便利な生活を提供することで人びとを幸せにしようとするが、宗教は苦しみの中に幸せを見いだすことを重視するという点。
④ 科学は人工知能を活用して人びとを幸せにしようとするのに対し、宗教は人びとを命あるものとして大切にし、幸せにするという点。
⑤ 科学は新たな幸せのあり方を人びとに示そうとするが、宗教はそのようなことはせず、人びとの今の幸せを守ろうとするという点。

問4　傍線部（2）「この仕組みが逆手に利用されています」とあるが、それは具体的にどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

① 私たちは、脳にドーパミンが分泌されると成功を認識し、嬉しさを感じるシステムを持っているが、ゲームのような娯楽はそれを逆転させ、人工的な環境の中で成功を認識させることにより、常にドーパミンが分泌されている状態を作り出すということ。
② 私たちは苦労して成功したことに対して報酬が与えられると嬉しくなり、さらなる成功を求めようとするが、ゲームのような娯楽は、そのような人間の特性をうまく利用しており、そのため、わたしたちはいつまでもゲームを続けることになるということ。
③ 私たちはそれまでできなかったことができるようになると、脳にドーパミンが分泌され、嬉しいという感情を味わうが、ゲームのような娯楽ではむしろ、人工的に成功体験を作り出すことで、ドーパミンの分泌を促すようになっているということ。
④ 私たちは、成功体験に応じて脳にドーパミンが分泌され、嬉しいという感情が生み出されるシステムを持っているが、ゲームのような娯楽

はそれを逆手にとり、ドーパミンの分泌を促すことによって私たちに成功感を味わわせるようになっているということ。

⑤　私たちは科学技術を発展させることによって社会を豊かにし、ゲームのような娯楽まで楽しむことができるようになったが、皮肉なことに、今ではゲームに時間を浪費し、せっかくの豊かな生活を楽しむ精神的な余裕を失ってしまっているということ。

問5　空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

①　目的と方法をかたくなに守っている
②　目的が方法をしのぐようになった
③　目的に方法が即応するようになった
④　目的と方法を同一視してしまっている
⑤　目的と方法が入れ替わってしまった

問6　空欄 Y を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

①　嫌悪感
②　既視感
③　閉塞感
④　罪悪感
⑤　劣等感

問7　傍線部（3）「留意すべきなのは」とあるが、筆者はどのようなことに留意すべきだと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12 。

① 私たちは新しい評価軸を勝手に設定し、それに従って自分だけの世界を作るのを好むこと。
② 多様性が求められる場面でも、私たちは画一的な基準を設定したがるきらいがあること。
③ さまざまな評価基準があっていいのに、私たちは自分の評価基準を絶対化しがちであること。
④ 「選択と集中」と言っておきながら、私たちは実際には、そのようなことはできないこと。
⑤ 新しく評価軸を作らなくてはいけなくても、私たちは既存の評価軸を捨てられないこと。

問8 傍線部（4）「社会は人工知能化します」とあるが、社会が人工知能化するとはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 13 。

① 社会から余裕が失われ、経済的なコストが優先されるようになること。
② 社会が一律の価値観で縛られ、人間的な判断が必要とされなくなること。
③ 社会のあちこちに人工知能が普及し、人間の活躍の場が失われること。
④ 社会全体が、人工知能が作ったルールに縛られるようになること。
⑤ 社会が成果主義的な価値観で統一され、ムダが許されなくなること。

問9 傍線部（5）「人工知能が私たちを席巻することはあり得ないでしょう」とあるが、筆者がそのように言うのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 14 。

① 人工知能は絶対の評価軸にしたがって「選択と集中」を実行することは得意だが、私たち人間のようにさまざまな価値観を発展的に統合して何かを生み出すということはできないという点で、人工知能は私たちには及ばないから。
② 人工知能は特定のルールにもとづいて論理的に物事を進めることにはたけているが、私たち人間のように無数の可能性の中から自分だけの世界を作ることはできないという点で、人工知能が私たちに取って代わるとは考えられないから。
③ 人工知能はプログラムを改善することによって性能を向上させてきたが、私たち人間のように成功体験にもとづいて自分を成長させていく

ことはできないという点で、人工知能は私たちを超えていくことなど不可能であるから。

④ 人工知能は一律の評価軸を作り、それに従って物事を処理することはできるが、私たち人間のように多様な評価軸や価値観をもとに戦略を立てることはできないという点で、人工知能が私たちの知能を上回ることは起こり得ないから。

⑤ 人工知能は人間が決めたルールに従って、効率的に物事を処理する能力は高いが、私たち人間のように幸せを感じる余裕を持ち合わせていないという点で、人工知能が私たちをしのぐ存在になると予想することはできないから。

問10 次に示すのは、本文について学習した後に、**先生**の問題提起をもとに**生徒**が話し合っている場面である。本文を踏まえた発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

先生――今回の学習で扱った文章の終わりの部分で、筆者は人工知能と生命知能の共存に言及しています。その箇所には二重傍線を引いておきました。筆者の考えを参考にして、その共存のあるべき姿について話し合ってみましょう。

① **生徒A**――筆者は人工知能に対して、生命知能という言葉を使っているけれど、これは端的には私たち人間の知能のことだよね。二つの知能は両方とも、幸せを実現するために存在すると筆者は述べている。そして、それこそが筆者の考える人工知能と生命知能の共存の原点なんだと、私は思うよ。

② **生徒B**――たしかに、私たちの幸せは大事だけれど、筆者は人工知能をそのために用いるべきだとは言っていないと思うんだよね。むしろ、人工知能と生命知能という二つの知能の特質を生かしながら、使い分けることが必要だと考えている。そのような意味での多様性が、今は求められているんじゃないかな。

③ **生徒C**――筆者は二重傍線部に先立つ部分で、人工知能と生命知能のそれぞれの特質に触れているよ。それにもとづけば、人工知能は明確なロジックに沿って思考するのに対し、生命知能は多様性を基礎に新しいものを作り上げていくということになる。二つの知能の共存とは、そのような違いを前提に考えるべきなんだよ。

④ **生徒D**――私もそう思うな。今は何でも人工知能をありがたがるような風潮があるけれど、是々非々の扱いをするべきだと思うんだよね。この社会を作り上げてきたのは人間なんだから、これからも生命知能が中心であるべきさ。人工知能はあくまでも副次的な存在として、人間のサポートに徹すればいい。

⑤ **生徒E**――Dの意見には、基本的には賛成だな。人工知能をいたずらに重用するのは問題だよね。そんなことをしたら、人工知能に仕事を取られてしまう。人工知能と生命知能の共存を図るべきだと言っても、それは人間を幸せにすることが最大の目的であるべきで、その意味では、宗教との共存も考えるべきだと思う。

Ⅱ　次の文章を読んで、後の問1～問9に答えなさい。

さまざまなナショナリズムの区別論のうち、特に影響力の大きいものとして、(1)《シヴィック・ナショナリズムvsエスニック・ナショナリズム》という図式がある。文字通りこの表現をとらないまでも、ある程度共通性のある発想まで含めていうなら、この二分法図式は非常に多くのナショナリズム論に共有されているといえる。

この二分法的な議論の系譜は、古い起源をもっている。古典的には、ドイツの歴史家(注1)フリードリヒ・マイネッケの「国家国民」と「文化国民」の区別や、(注2)ハンス・コーンの「西のナショナリズム」と「西以外の世界のナショナリズム」(単純化していえば「東のナショナリズム」)の区別が有名である。コーンの大著『ナショナリズムの理念』は、「西のナショナリズム」は合理主義・啓蒙(けいもう)主義・リベラリズム・民主主義と結びついたのに対し、それ以外の地域でのナショナリズムはドイツを筆頭としてしばしば非合理主義・ロマン主義・排他性に傾いたと指摘した。コーンの記述は(ア)多岐にわたり、それほど機械的な図式化をしているわけではないが、結論が明快であるため、後の論者に大きな影響を及ぼした。これらの古典的作品の影響のもと、(注3)プラムナッツ、ゲルナー、スミス、グリーンフェルド、ブルーベイカー、イグナティエフ、樋口陽一らは、それぞれに若干の修正をもちこみつつ、大枠で「西のナショナリズム」＝シヴィック・ナショナリズムと「東のナショナリズム」＝エスニック・ナショナリズムという二元的図式を定式化した。

いま挙げた論者たちの議論は、細かくいうなら種々の差異があり、そう簡単には一括できない（また、必ずしも単純な二分法だけで満足しているとは限らず、大なり小なりそれを修正する補足を付け加えている場合も多い）。しかし、ここでは大づかみな理解が目的なので、あえて細部を無視して単純にまとめていうなら、次のような図式が多くの人によってとられているといってよいだろう。すなわち、ネイションの基礎にエスニックな共通性があるという考え（エスニック・ナショナリズム）が優位な国においては、一つのネイションの中のエスニックな異分子に対する排他的な政策や強引な同化政策がとられる。エスニックな一体性およびそのシンボルが価値をもつのは非合理的な情念に基づくから、そこでは合理主義や自由主義は排斥され、そうした国の政治は多様性や自由を尊重しない権威主義に傾き、自民族中心主義(エスノセントリズム)・排外主義などが優勢となりやすい。これに対し、ネイションはエスニックな共通性に基づくわけではないという考え（シヴィック・ナショナリズム）の強い国においては、ネイションへの帰属を承認するすべての人が、［　X　］。そこでは、エスニックな多様性や個人の自由が尊重され、政治の基礎はもっぱら憲法体制の承認におかれる。こうして、前者は非合理主義・権威主義・排外主義などと結びつきやすく、後者は合理主義・自由主義・民主主義などと結びつきやすい、というわけである。

このような区分は直観的にある種の妥当性をもつかに見え、多くの人々に強い影響を及ぼしている。しかし、これが本当に現実をうまく映し出しているかと考えると、いくつかの疑問が出てくる。

二分法に立つ多くの論者の共有する一般的イメージとして、「西」ではシヴィック・ナショナリズムが優勢で、それはエスニックな差異に寛容であり、偏狭さをもたないのに対し、「東」ではエスニック・ナショナリズムが優勢で、それはエスニックな差異を絶対視するために偏狭で排他的なものになりやすい、というものがある。しかし、このような見方は(イ)ややもすれば「西」を理想化し、「東」を蔑視するオリエンタリズム的発想の一種となってしまう。確かに、「ネイション」ないしその同系語が各国語でどのようなニュアンスをもって使われているかについていうなら、英仏語ではエスニックな意味合いが相対的に薄く、独露では相対的にそのニュアンスが強い。[　Y　]。「ナーツィヤ」の語が主にエスニックな意味で使われるロシア語でも、他の表現によってシヴィックな共同性を指すことができる。

「東」と括られる諸国はそもそも均一ではないから、それらを一括して「東」と呼ぶこと自体が粗雑に過ぎることは、多少なりともこれらの地域のことを丁寧に考えようとすれば明らかである。また、多くの「東」の諸国は一九世紀末以降に西欧諸国の影響を強烈に受け、その模倣として「国民国家」化を目指す中でナショナリズムが(ウ)台頭したので、それを「西」と無縁な「遅れ」「野蛮」「逸脱」などと見るのは妥当でない。トルコにおけるクルド人に対する迫害は、シヴィック・ナショナリズムと共和主義の論理によって正当化されてきた。「宗教と民族に関わらないトルコ国民」という観念が、非トルコ系諸民族の民族的自己主張を否定する論理として機能したからである。旧ユーゴスラヴィアにおける内戦も、西欧型「国民国家」への強烈な憧れ、そして特に北部の共和国（スロヴェニアとクロアチア）が「自分たちだけは西欧の仲間入りすることができる」という発想をもったこと――さらにいえば、多くの西欧諸国が、こうした「ヨーロッパ的な」共和国を優先的に応援しようとしたこと――が大きな背景をなしている。このような事情を背景として引き起こされた惨劇を、「西」と無縁な「バルカン的野蛮」のあらわれとみなすのは適切でない。

他方、ネイションの語がシヴィックな意味で使われることの多い西欧でも、現実には、ネイション統合の基礎には言語・文化の均質性が前提されており、しかも(2)それは「自然に」形成されたのではなく、長期にわたる「上からの」政策を必要とした。最も典型的なシヴィック・ナショナリズムの国とされるフランスで、フランス語による言語的同化政策がフランス革命以後に強烈に推進されたのは周知のところである。イギリスにおけるスコットランドやウェールズの問題は、この国もある種のエスニック・ナショナリズムと無縁でないことを物語る。アメリカ合衆国は多数のエスニシティが分散居住する移民の国であるために、エスニシティのネイション化が抑止されやすい構造があるが、それでも英語

による統合は長らく自明の前提とされてきた。ドイツやイタリアは国家統一に先立って「国民」の統一があったと常識的にいわれるが、実際にはその「国民」の中に地域的異質性があり、その統合は長期的な問題であり続けた。こういう事情を考慮するなら、「西では国民の均質性が高く、東では非均質性が大きい」という対比はやや誇張されているところがある。

このように書いたからといって、西欧諸国における「国民国家」形成と、後にそれを模倣しつつ「国民国家」化を進めた地域のナショナリズムのあいだに何の違いもないといおうとするのではない。相対的に早い時期に国民国家化した諸国では、その過程が長期にわたって進行したために、後から振り返ってみると、(3)それがあたかも「自然な」過程だったかに見えるところがある（渦中ではかなり強引なことが行なわれたとしても、遠い過去となってしまえば、そのことは忘れ去られ、その痕跡も目立たなくなる）。そして、国民国家化がある程度以上の成功をおさめた後の地点に立つならば、その均質性・安定性は一種の既成事実とみなされるようになる。いったんそうなれば、国家の枠を不動の前提とした上で、その中でのさまざまな利害対立を民主的・合法的・平和的に調停することが相対的にできやすい。これに対し、より遅い時期に、先進国からの衝撃を受けつつ、その模倣を急速に進めることを迫られた地域では、国民国家形成に伴う矛盾がよりあらわとなり、(4)尖鋭（せんえい）な紛争を伴うことが多い。このような違いが、「西のナショナリズム」と「東のナショナリズム」といわれるものの背後にはある。

しかし、これはあくまでも相対的な差異に過ぎない。「西」の「先進国」でも「解決済み」だったはずのエスニック問題が新たな形で噴出することがあるし、「東」の「後進国」といえども、常にエスニック紛争が尖鋭化しているわけではない。国民国家化につきまとう紛争が具体的にどのような形をとり、どの局面で特に尖鋭化したり、相対的に［Z］するかは無数の歴史的要因によるのであって、西／東、シヴィック／エスニック、リベラル／非リベラルといった二分法で片づけるわけにはいかない。

（塩川伸明『民族とネイション――ナショナリズムという難問』岩波書店）

（注1）フリードリヒ・マイネッケ――ドイツの歴史学者（一八六二―一九五四）。第二次世界大戦後は、最も伝統的な歴史学者としてドイツ史学界に君臨した。

（注2）ハンス・コーン――プラハ出身のアメリカの哲学者、歴史学者（一八九一―一九七一）。

（注3）プラムナッツ――イギリスの政治学者（一九一二―一九七五）。以下「樋口陽一」まで、各国の著名な学者が挙げられている。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　傍線部（ア）～（ウ）の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 16 ～ 18 。

（ア）多岐にわたり 16

① 変化を繰り返し
② 幅広く受け入れられ
③ 一部に難点があり
④ さまざまな分野に及び
⑤ 別の領域に転用され

（イ）ややもすれば 17

① ほどなく
② すべからく
③ まさしく
④ とかく
⑤ おそらく

（ウ）台頭した 18

① 優位な立場にたった
② 当たり前になった
③ 見違えるようになった
④ 注目されるようになった
⑤ 新たに勢力をもった

問2　傍線部（1）「《シヴィック・ナショナリズムvsエスニック・ナショナリズム》という図式」について、筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19 。

① 古い起源をもったナショナリズムの区分法であり、端的には「東のナショナリズム」と「西のナショナリズム」の対立を表すが、現在の国際情勢を考えると、時代錯誤なものになってしまっている。

② さまざまなナショナリズムについての考え方がある中で、最も影響力の強い図式の一つであり、それぞれのナショナリズムを構成する多様な要素を、すべて「東」と「西」の問題へと還元するものである。

③ 多くのナショナリズム論やその論者によって共有されている図式ではあるが、それぞれのナショナリズムに一義的な定義があるというわけではなく、その内容は相対的なものにならざるを得ない。

④ 「先進国」対「後進国」という二分法をもとにして、多くの論者が議論を重ねることによって作り上げた、ナショナリズムに関する対立図式であり、矛盾はあるものの、今でも一定の意義を有している。

⑤ さまざまな形態をもつナショナリズムを、地理的な条件にもとづいて区別した図式であり、したがって「東」対「西」と表現することもできるが、それぞれのナショナリズムの内容は流動的である。

問3　空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20 。

① 任意のエスニシティに帰属することを許容される

② エスニシティに関わりなく同等の権利を認められる

③ 権利保障の条件としてエスニシティの克服を求められる

④ エスニシティにもとづき十分な権利を保障される

⑤ エスニシティと国籍を一致させることを強いられる

問4　空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 21 。

① それにもかかわらず、このような「国民」観の違いは、そのまま言葉の選択を規定することになる
② したがって、このような言葉のニュアンスの違いがそのまま、「国民」観に影響することはまずない
③ なぜなら、このような言葉の違いに表れる「国民」観は、国家を超えた普遍的なものだからである
④ しかし、このような言葉づかいの差異は、それぞれの国の「国民」観を直ちに規定するわけではない
⑤ なるほど、このような「ネイション」に対する温度差は、各国の「国民」観の違いに如実に表れている

問5 傍線部（2）「それ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22 。

① ネイションの語
② シヴィックな意味
③ 西欧
④ 統合の基礎
⑤ 言語・文化の均質性

問6 傍線部（3）「それがあたかも『自然な』過程だったかに見えるところがある」とあるが、「自然な」にカギ括弧が付けられているのはなぜだと考えられるか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23 。

① 相対的に早い時期に国民国家化した「西」の諸国は、短い期間で強引にネイションの統合を進めた「東」の国にくらべ、緩やかに統合を進めてきたので、その過程は連続性のある自然なものであったことを強調するため。
② 相対的に早い時期に国民国家化を実現した諸国では国民統合までの道のりが長かったので、それがあたかも自然に進行したように見えるが、実際には、その中で「上からの」強引な政策が行われていたことを示唆するため。
③ 相対的に早い時期に国民国家化したシヴィックな国々では、国家形成に至るまでの過程でかなり強引な政策がとられていたにもかかわら

ず、外部からそれを見ると自然な過程であるかのように映ることを強調するため。

④ 相対的に早い時期に国民国家化した西欧諸国ではシヴィック・ナショナリズムが自然発生的に起こったかのように思われているが、そもそもナショナリズムは自然に起こるものではないということを強調するため。

⑤ 相対的に早い時期に国民国家化した諸国では国内的な統合がかなり強引な手法で進められたとされるが、筆者はそのように考えてはおらず、むしろ統合は長い時間をかけて自然に進んだと考えていることを示唆するため。

問7 傍線部（4）「尖鋭な紛争を伴うことが多い」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① いわゆる「東」の国々や地域では、非合理的な価値観が横行する「野蛮」な一面が今も残り、その後進性ゆえに、「西」側と価値観をすり合わせることはほぼ不可能だから。

② いわゆる「東」の国々や地域では、言語や文化の面で「上からの」政策がとられることが多く、その反動としてエスニックな意識が一気に顕在化することがあるから。

③ いわゆる「東」の国々や地域では、ネイションの統合が急速かつ強引に進められたため、その過程で解決されてこなかった問題は、矛盾となって噴出することになるから。

④ いわゆる「東」の国々や地域では、さまざまな形をとって起こる利害対立を穏便に解決することが難しく、特にシヴィックとエスニックの対立は過激なものとなって現れるから。

⑤ いわゆる「東」の国々や地域では、「解決済み」とされた問題が今でも多く残っており、それが原因となって排外的なエスニック・ナショナリズムが高まりやすいから。

問8 空欄 Z を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① 一元化

② 内在化
③ 前衛化
④ 流動化
⑤ 穏健化

問9 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は 26 ～ 30 。

ア 国民はエスニックな特徴をもとに形成されるという考え方が支配的な国では、異分子に対する排他主義が起こりやすく、旧ユーゴスラヴィアにおける内戦はまさにその一例である。 26

イ ナショナリズムをその主たる特徴にしたがって区別することは可能だが、そこに現れる差異はあくまでも相対的なものにすぎず、現実のナショナリズムはもっと複雑な構造をもつといえる。 27

ウ トルコにおける民族的な迫害は、エスニックな問題の現れであるというよりは、シヴィック・ナショナリズムと共和主義がトルコに入り込んだ結果として起きたと考えるべきである。 28

エ 「西」の国々にも、エスニック・ナショナリズムの問題は存在するが、だからといって、その点だけを取り上げて「西」と「東」の区分は無効であるということにはならない。 29

オ エスニック・ナショナリズムは合理主義的、論理的ではなく、極端な排外主義に傾くこともあるため、将来的にはシヴィック・ナショナリズムによって克服されなければならない。 30

Ⅲ　次の文章を読んで、後の問1～問10に答えなさい。

おおよその話ですが、近代になって、藝術（げいじゅつ）の所産は「作品」になるとともに「商品」となりました。作品とは、単なる製品とは異なり、独特の精神的な内部をもち、その内部のゆえに、作者との独特の絆（きずな）をもち、ある程度まで人格と似たようなあり方をしている個性的な作物のことです。【　①　】商品となるのは製品ですから、作品と商品は矛盾した関係にあります。そこで、近代美学においては、作品の側面が［　A　］され、それが同時に商品でもある、ということについて人びとは、言わば見て見ぬふりをしてきた、というふしがあります。(注1)ベートーヴェンのような藝術家がいかに貧困であったか、ということは頻繁に語られ、それがかれらの名誉になりますが、［　X　］は、あまり表に出てきません。

大名が江戸や京から絵師を呼び寄せて、襖絵（ふすまえ）を画（か）かせるとか、中世やルネサンスの時期に王侯や司教が画家にフレスコ画を画かせる、という場合、藝術家は報酬を受けるのであって、作品が商品になるわけではありません。フレスコ画の画かれた壁面は、原則として取り外すことはできませんし、襖もまた、どの建物のどの部屋にでもはまるものではありません。【　②　】絵画が壁画からタブローに、つまり壁に掛けるかたちの板絵やキャンヴァス地の絵画になることが、条件になります。一度に多数の同じ図柄の作品を制作できる版画の場合には、商品としての性格は明らかです。自ら版刻し印刷を行った最初の大画家と見られるのは(注2)デューラーですが、一五世紀末のことです。【　③　】また木版による浮世絵の歴史が始まるのは、少し遅れて一七世紀末のことです。版画は美術における最初のマスメディアと見ることのできるもので、油絵として画かれた名画の図柄は銅版画によって広く知られるようになりました。それと同時に、制作者の側には（多くは版元、しかし藝術家自身であることもあります）、購買者がどのような版画を求めているかという意識が、言い換えると何が売れるのかという関心が芽生えてくることになります。

音楽の場合、商品化の歴史を垣間見るには、(注3)モーツァルトの伝記を思い出すのが好都合です。二世代ほど先輩の(注4)ハイドンが長らくエステルハージ侯爵のおかかえ楽師であったことはよく知られています。モーツァルトの父が息子アマデウスのために、そのような勤め口を望み、そのためにも各地に演奏旅行を試みたことが、伝記のなかに記されています。定職がない場合にどうしたかと言えば、自作を取り合わせたプログラムを組んで自ら演奏会を催し、入場料を取って収入を得ていました。王侯が音楽家を雇うのが古い（フレスコ画に相当する）あり方であったとすれば、演奏会は商業原理による新しいあり方です。モーツァルトが生きていたのは一八世紀後半のことで、それ以降、音楽においても、演奏会というかたちでの「商品化」が［　B　］してきました。

版画は複数化という意味での複製でした。音楽においてこれと同様の複製は、録音技術の発明を俟って初めて実現されました。【　④　】カラヤンのようなスター指揮者が、録音によって巨万の富を築いたことは、音楽史上かつてなかったことです。デジタル技術は、消費をも簡便なものとし、ＣＤシングルの売上枚数を飛躍的に高めました。半年後には多くのひとが忘れているような《ヒット・チューン》が、いとも容易に一〇〇万枚のセールスを達成したほどです。ところが、(1)このデジタル技術は、商品としては一種の自殺的な効果も伴っています。デジタル技術の長所の一つは、コピーに強いことです。わたくしはＣＤの音が嫌いですが、コピーしたときに音の劣化の少ないことは認めます。このページを読んでくださっている方のなかにも、レンタルでＣＤを借りてきて（あるいは配信サービスを利用して）、パソコンでコピーし、それで音楽を聴いている、というひとが少なくないことでしょう。これが商品としてのＣＤにとって打撃にならないはずはありません。一方においてＣＤの売上枚数を飛躍的に高めたデジタル技術が、他方で商品に対する脅威になる、という皮肉な現象が生まれているわけです。

商品の側面にこれ以上立ち入るつもりはありませんが、コピーとしての藝術が、その観賞形態に変化をもたらすことは明らかです。【　⑤　】切符を手配し、スケジュールをやりくりし、それなりの身支度をし、電車を乗り継いでコンサート会場に行き、多くの聴衆とともに、一回かぎりの演奏に集中することと、寝ころがり、新聞を読みながら、ヘッドフォンでＣＤを聴くのは、非常に異質な経験です。前者が本当の藝術観賞の仕方であって、後者はまがいもの、あるいは間に合わせの観賞形態なのでしょうか。そうだとすると、［　Ｙ　］、という奇妙なことになるでしょう。かくして、科学技術の生み出したコピーという新タイプの存在は、商品の経済学のみならず、何が「正しい」観賞法かという美学の問題をも引き起こすことになります。

美学上の新しい問題として《複製》が論じられるようになって、既に相当の年月が経過しましたが、少なくとも当初は、二つの意味の複製が混同されていたように思われます。一つは版画に見られるような、マスプロダクションとしての複製で、複数化を意味します。もう一つはオリジナルをコピーした複製です。厳密に言えば、複製という日本語としては第二の意味だけが妥当するでしょう。しかし、この問題を論じた(注5)ベンヤミンの先駆的な論文が「複製技術時代の藝術作品」（一九三六）というタイトルで知られ、しかも、この論文が扱っていたのが写真や映画のような「複数化」の現象であったため、この混同が起こったのかと思われます。オリジナルに対するコピーは、価値の点で絶対に劣るもので、そのことが、コピーという概念のなかに含まれている、と言うことができます。それに対して、版画や写真、映画のような、本質的に複数化する藝術の場合、「マザー」と呼ぶべきものはあります。版木、銅版や石版、ネガフィルムなどがそれですが、(2)これはオリジナルではありません。映画のマザーは、それを映写することができますが、版木やネガフィルムはそれ自体を直接観賞の対象とすることはできません。

また、A館で上映されているフィルムと、B館で上映されている同じ作品のフィルムのあいだに、一方がオリジナルで、他方がそのコピーであるといった、優劣の関係はありません。

ところが、(3)複数性の意味での複製にも、やはり価値の問題がついてまわります。複数のものが作られるなら、必然的に価格が下がるからです。同一の作家の作品で、一〇〇枚刷られる版画が、一点制作の油絵よりも高価である、というようなことは、よほど例外的な状況でもないかぎり、考えられないことです。ベンヤミンの古典的な議論にも、この特徴を強調するところがありました。写真や映画は、絵画や演劇に較べて安価です。映画はたしかにマスプロダクションと言えますが、写真の場合、多数のプリントが作られるものは実は少数でしょう。しかし、同じ写真が書籍や新聞に印刷されるなら、版画を超えるマスプロ効果が生まれます。それらが安価であることは、この効果の重要な一部です。安価になったことによって、それまで裕福な人びとの手に独占されていた藝術が、広範な民衆のものとなったからです。貧困な階層に共感を抱いていたベンヤミンは、当然、この科学技術によって可能となった新しい藝術に［C］を寄せました。そして、この新しい形態において藝術が大きな変化を遂げると考えました。すなわち、裕福な少数の人びとの手のなかにあった藝術がもっていた独特の高級感（それをベンヤミンは「アウラ」〔光輝〕と呼びました）を喪って、言わばむき出しのものになる、と主張したのです。

(4)この議論には、根本的な誤りがあります。たしかに、一般的に演劇の入場料は、映画館の入場料よりも高価です。しかし、舞台俳優と映画俳優を較べた場合、遠い存在である映画スターの方にわれわれはアウラを感じている、と思われます。また、写真を絵画と、また映画を演劇と引き較べる議論もいまでは過去のものです（かつては××劇場という名の映画館が少なくありませんでしたが、映画を演劇の《複製》と見る意識の反映です）。いまでは、写真も映画も、絵画や演劇とは異なる、独特の藝術形式と見做されています。つまり、これらの作品を複数化する藝術が、ただちに藝術性を割り引かれる、というわけではありません。

かくして、美学において複製の問題は、コピーの意味でのそれに［D］されます。録音された音楽は、たしかにコピーと言うことができます。そのもとにはオリジナルと見るべき生演奏があったはずだからです。少し意味合いは違いますが、映画のビデオや写真（のオリジナル・プリント）の印刷図版のようなものも、録音と似たコピーです。さらに、第二次元のものと見るべきコピーがあります。既に指摘したことですが、CDやビデオからコピーを作る（いわゆるダビングする）ことです。藝術のあり方に関わるのは、(5)この第一次元のコピーです。

（佐々木健一『美学への招待』中央公論新社）

（注1）ベートーヴェン――ドイツの作曲家（一七七〇―一八二七）。
（注2）デューラー――ドイツの画家、版画家（一四七一―一五二八）。

（注３）モーツァルト――ザルツブルク出身の音楽家（一七五六―一七九一）。主にオーストリアを活動の拠点とした。
（注４）ハイドン――現在のオーストリア出身の音楽家（一七三二―一八〇九）。一七六一年からは、エステルハージ家の宮廷音楽家となった。
（注５）ベンヤミン――ドイツの文芸批評家、哲学者（一八九二―一九四〇）。

＊問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　空欄 A ～ D を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号は A・31 、B・32 、C・33 、D・34 。

① 捨象　② 進行　③ 強調　④ 期待　⑤ 集約

問2　空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 近代美学に対する批判的な議論
② 作品そのものに関する批評
③ 市井の人びとにまつわる挿話
④ 藝術が生まれるまでの物語
⑤ 大きな富を築いた藝術家の話

問3　傍線部（1）「このデジタル技術は、商品としては一種の自殺的な効果も伴っています」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36 。

① CDのようなオリジナルをコピーした「商品」は、デジタル技術を用いているため、複製による質の劣化を最小限に食い止めることはできるが、それでもオリジナルに対しては価値の点で絶対に劣るということ。
② デジタル技術の所産であるCDは、コピーを容易にすることができ、そのため、数多くのヒット・チューンを生み出すことに貢献するが、一方で、コピーした音はどうしても質的に劣化することを免れないということ。
③ CDをはじめとするデジタル技術の「商品」は、音楽の消費の仕方を身近で簡単なものにするが、その一方で「作品」としての音楽を駆逐し、質の高い音楽に触れる機会を人びとから奪うことにもなるということ。
④ デジタル技術が用いられたCD等の商品は、気軽に消費することができるが、その反面、あまり質を落とさず簡単にコピーすることができ

るので、商品そのものが商品の売り上げを圧迫することになってしまうということ。

⑤ デジタル技術は音楽の消費を簡便なものにし、たとえばCDの売り上げを飛躍的に伸ばすようなこともあるが、その一方で、質の高い本物の音楽作品を駆逐し、音楽市場全体を縮小させるような結果を生むということ。

問4 空欄 Y を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37 。

① コピーでしかないCDの音楽をところかまわず聴くのが、多くの人びとにとっての《本当の》観賞態度となる
② デジタル技術の所産でしかない商品が、一般の人びとには《本当の》作品としてありがたく受け入れられている
③ 前者のような《本当の》音楽に触れたいのならば、手間暇をかけて現地まで行き、観賞しなければならない
④ 現代では、どのような観賞の方法をとったとしても、《本当の》音楽作品にたどり着くことはついにできない
⑤ たくさん音楽を聴いたことがあるにもかかわらず、《本当の》音楽は知らない、というひとが非常にたくさんいる

問5 傍線部（2）「これはオリジナルではありません」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38 。

① たとえば、写真に対するネガフィルムは「マザー」に当たるが、それ自体は観賞の対象になることがないという点でオリジナルとは異なり、また、コピーに相当するものを生み出すこともないということ。
② たとえば、版画のもととなる銅版や石版等を指す「マザー」は、コピーに対応するオリジナルとは異なり、複製した作品を生み出すようなことはないため、いつまでも藝術としての価値を失わないということ。
③ たとえば、コピーのもととなったCDは「マザー」ということになるが、それは直接観賞の対象となることはあり得ず、再生のための機器を必要とするという点で、オリジナルとは異なるということ。
④ たとえば、写真のような複製を生み出すもととなる「マザー」と呼ばれるものは、「複数化」におけるオリジナルとは異なり、それが直接観賞され、評価されるようなことはまずないということ。
⑤ たとえば、版木やネガフィルムといった「マザー」は、そのコピーである版画や写真があってはじめて観賞されることになるという意味で、

複製におけるオリジナルとは根本的に異質であるということ。

問6　傍線部（3）「複数性の意味での複製にも、やはり価値の問題がついてまわります」とあるが、ここでいう価値の問題とは具体的にどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 39 。

① 複数のものが広く流通している商品は、作り手との絆を欠いているため、市場での評価も高くはならないというもの。
② マスプロダクションとして複製された作品は、当然、一点だけ作られた作品より相対的に価格が下がるというもの。
③ 複製された作品はコピーでしかないため、一点制作の作品よりも高い値が付けられることは原則的にないというもの。
④ オリジナルをもとにして複製された商品は、同じものが多数流通することになるため、必然的に安価になるというもの。
⑤ コピーされることにより安価になった藝術は、多くの人びとによって享受されるが、藝術性は希薄になるというもの。

問7　傍線部（4）「この議論には、根本的な誤りがあります」とあるが、なぜそのようにいえるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 40 。

① ベンヤミンの考えにもとづけば、藝術は何度もコピーされることによって、オリジナルとしての「アウラ」を喪うことになる。しかし、そうなるとかえって、オリジナルの持つ崇高さは高まり、人びとはそこに「アウラ」を感じることになるといえるから。
② ベンヤミンはその論文の中で、「アウラ」の喪失について指摘し、科学技術によって作品の藝術性が損なわれる危険を指摘した。しかし実際には、民衆は新たな形態の藝術を歓迎し、そこに以前とは異なる「アウラ」を見てとるようなことさえあるといえるから。
③ ベンヤミンによれば、マスプロダクションによる新しい形態の藝術は、大衆化し、「アウラ」を喪失するとされる。しかし、マスプロダクションの一形態である映画では、一般の人びとは手の届かない映画スターに「アウラ」を感じているといえるから。
④ ベンヤミンはかつて、藝術は科学技術によって複数化されることにより、独特の高級感と「アウラ」を喪うと述べた。しかし、それは複製と複数化を混同した結果であり、複数化された藝術からも、人びとは十分に「アウラ」を感じ取っているといえるから。
⑤ ベンヤミンは、作品がマスプロダクション化されれば藝術としての「アウラ」を喪うことになると指摘した。しかし、マスプロダクション

の典型である映画は、映画スターと呼ばれる存在を生み出し、「アウラ」はなくとも幅広い人気を得ているといえるから。

問8　傍線部（5）「この第一次元のコピー」とあるが、それに相当するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 41 。

① 映画館で上映される映画
② ビデオをダビングしたもの
③ 写真のネガフィルム
④ 藝術家が画いたフレスコ画
⑤ 生演奏を録音した音楽

問9　次の一文が入るべき箇所を、本文中の【 ① 】～【 ⑤ 】のうちから一つ選べ。解答番号は 42 。

【商品になるためには、どこに持っていっても、誰の求めにも応えられるものである、ということが必要です。】

問10　次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は 43 ～ 47 。

ア　デューラーが始めたとされる版画は、マザーから作り出される複数化という意味での複製であり、CDやビデオをダビングしてコピーを作るという複製とは異なるものである。 43

イ　ベンヤミンが「複製技術時代の藝術作品」というタイトルの論文の中で、写真や映画のような「複数化」の現象を論じたため、その後、美学の世界では《複製》の定義に混乱が生じた。 44

ウ　近代になると、藝術の所産が商品化し、市場で売買されるようになったが、すでに中世において、画家は報酬を得てフレスコ画を描いており、それが商品化をもたらす端緒となった。 45

エ　マスプロダクションの産物である映画は、演劇に較べれば安価であり、一般の民衆でも楽しむことができるが、かといってその藝術として

の価値が演劇よりも低くなるというわけではない。 46

オ　近代においては藝術の観賞形態に変化が生じ、人びとはわざわざコンサート会場に行かなくても、音楽を楽しめるようになったが、そのことは作品の「アウラ」を稀薄化することにつながった。 47